

「武  
唐  
平  
成」

「文」第八十四号 抜刷  
三月十三日 発行

# 左日記略注（六）

徳  
原  
茂  
実

## 土左日記略注（六）

徳 原 茂 実

「土左日記略注」は、平成二十七年十一月刊の『武庫川国文』第七十九号に「土左日記略注（一）」を發表して以来、毎号連載してきたのであるが、今回の「土左日記略注（六）」をもって完結とする。今回取り上げるのは二月九日条から最終二月十六日条まで。これまでと同様、問題とする箇所を含む本文を引用し、私見を述べるという形で進めたい。「凡例」は「略注（二）」または「略注（三）」を参照していただくこととし、ここでは省略する。なお、これまでと同様、この日記を執筆したとされている女性については括弧付きで「作者」と表記し、真の作者紀貫之と区別する。

二月十六日条に取り上げている拙稿「土左日記を読みなおす」は、『日本語日本文学論叢』第十号（平成二十七年三月）に掲載した。「土左日記略注（一）」（六）の前提をなす基本的な考え方を示しているのので、参照していただければ幸いである。

二月九日

こころもとなさに、あけぬから、ふねをひきつつのほれども、かはみづなければ、ゐざりにのみぞゐざる。

（注）「船をひきつつ上れども」は、川岸からの綱手による牽引を動

力として淀川を遡上するさまである。綱手による牽引は二月一日条に初めて「今日は箱浦といふ所より綱手ひきてゆく」と見え、二月五日条にも「綱手はやひけ」とある。これらは大阪湾沿岸部での話で、綱手曳きが可能な海岸に限って行われた。一方、淀川遡航は、おおむね綱手に頼った航行であり、川岸には綱手曳きの人夫たちが踏みしめて歩く通路が形成されていたと思われる。『類聚三代格』第十九「禁制事」所収の太政官府「応禁制河内摂津両国諸牧牧子等妨往還事」（昌泰元年十一月十一日）は、淀川を綱手曳きで上下する船と沿岸の牧場の牧子とのトラブルにかかわる官符である。

「川の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる」は、水深が浅いために遡航に難渋するさまで、二月七日条に「今日、川尻に船入りたちて、こぎ上るに、川の水ひて、なやみわづらふ。船の上ることいかたし」とあるように、淀川遡上の初めから悩まされてきたのである。ただし、女性である「作者」は気がついていない（ことになっている）のかもしれないが、ただでさえ水深が浅い上に、船の積荷が重いために喫水線が上がり、一層難渋する結果になったのではないかと想像してみたい。家族や一族郎党のためには、国司もそれなりの蓄財をするのは当然で、それを現代の眼から見て非難するにも及ぶまい。

このあひだに、わだのとまりのあかれのところといふところあり。

(注)「わだの泊のあかれの所といふ所」の所在については諸説あり、いまだ決着を見ていない。この問題については拙稿「土左日記に見る淀川水運」(『日本語日本文学論叢』第十二号 平成二十九年三月)に私見を述べたが、ここではそのあらましを紹介しておく。なお、以下「わだの泊のあかれの所といふ所」を、「わだの泊の…」と略称する場合がある。

前日、二月八日に停泊したのは「鳥養の御牧といふほとり」(現在の大府府摂津市鳥飼あたり)であった。また右の引用文の二文あとに「かくて船ひきのぼるに、渚の院といふ所を見つつゆく」とあるように、この日、船は「わだの泊の…」を通過して「渚の院といふ所」に達しているから、「わだの泊の…」は鳥養の上流、渚の院(枚方市渚)よりは下流にあり、西岸の高槻市と東岸の枚方市の間を流れる淀川流域のどこかであったと推測される。

私見によれば、「わだの泊」は「和田の泊」(「大和田の泊」とも。現神戸市)であり、「あかれ」は「別れ」と同意で、「あかれの所」は分岐点の意であろう。つまり「わだの泊のあかれの所」は「和田の泊への分岐点」であり、それが地名に準じるあつかいを受けて、「和田の泊のあかれの所といふ所」と呼称されているのであろう。「といふ所」とは、「略注(五)」二月一日条などに述べたように、「作者」が地名や地名に準ずる名称を記述する際に多用する書きぐせである。

難波津は当時、日本最大級の港だったが、淀川からの土砂の流入によって、すでに港湾としての機能の低下をきたしつつあったよう

だ。「土左日記」二月六日条において、難波津への入港から川尻到着まで一日を要しているのは、座礁を避けるために慎重な操船を要したからにほかなるまい。そのため、船舶が難波津を経由せずに西国へ往來できるように、早くも延暦四年(七八五)には、淀川西岸の現摂津市一津屋あたりと三国川(現在の安威川・神崎川)を結ぶ運河が開削された(『続日本紀』同年一月十四日条)。三国川の河口(河尻)は尼崎市の今福、あるいは杭瀬あたりで、ここを経由することによって、和田の泊(現神戸市)への往來が容易となり、運航距離も短縮されたのである。しかし、西国方面への船舶の往來が一層活発化したため、延暦四年開削の運河よりも上流に、淀川と三国川とを結ぶもう一本の運河(あるいは街道)が整備されたのではなからうか。「和田の泊のあかれの所」と称されたのは、その運河(あるいは街道)が淀川から分岐する地点で、現在の高槻市三島江あたりではなかったかと推測される。現在その痕跡は残されていないが、『土左日記』に「和田の泊のあかれの所(といふ所)」という、地名に準じる呼称が明記されているからには、このように考えるのが妥当かと思う。将来、考古学や歴史地理学の成果によって、その痕跡が見出されることを期待するものである。

「わだの泊の…」について、従来もっとも有力視されているのは、天坊幸彦が『上代浪華の歴史地理的研究』(昭和二十二年 大八洲出版)において提唱した説で、これを萩谷朴が『全注釈』に紹介し、賛意を表して以来、多くの校注本に取り上げられ、定説化していると言つてよい。それは「わだの泊の…」を現摂津市一津屋あたり、すなわち、延暦四年完成の運河への分岐点に比定する説であるが、船はそのあたりを二月七日、または八日にすでに通過しており、そ

の記事が二月九日条に挿入されるいわれはない。これを虚構として説明しようとする向きもあるが、この連載で見てきたように、『土左日記』における地名、あるいは地理的記述は正確であり、虚構の入り込む余地はない。

「わだの泊の：」については近年、久保田孝夫『土佐日記』に見る「淀川」（淀川の文化と文学）所収）や内田美由紀『土佐日記』「わだのとまりのあかれのところ」（『伊勢物語考』所収）に新説が提示されているが、それらに対しては前掲拙稿「土左日記に見る淀川水運」において批判を加えたので参照されたい。

よねいをなどこへば、おこなひつ。

（注）「米、魚など乞へば、おこなひつ」については『全注釈』が「この「こふ」者は、曲の泊まりに群がって、立ち寄る船の船客に物乞いをする修行者・乞食の類であり、貫之たちが、その乞食に対して、布施の行を「おこなった」ものであるという考えが、すべての条件を満足させる唯一の解釈として成立するのである」（同書三六六ページ）と主張している。これは「わだの泊の：」を歓楽街江口の対岸である一津屋に比定し、そこは修行者や乞食が蜃集して、旅客に物乞いをするのに格好の土地であるとする推定にもとづく解釈であり、後続の校注本の多くもこれを継承している。しかし、本稿では「わだの泊の：」を上流の高槻市三島江あたりに比定した。そのあたりに江口に匹敵するような繁華の地が存在したとは考えられない。修行者・乞食への布施という解釈を一概に否定することはできないが、別解を模索してみたいと思う。

淀川から三国川へ向かう運河（または街道）への分岐点はまさに交通の要衝であり、淀川方面や三国川方面への下り船、淀川方面や三国川方面からの上り船が錯綜するであろうから、それらが鉢合わせすることなく安全に往来できるよう、船舶の誘導などに従事する人たちが「和田の泊のあかれの所」で立ち働いていたのではなからうか。往来する船舶は、その人たちに便宜をはかってもらうために、なにがしかの金品を与えていたのではないか。それは定められた通行料金ではなく、いわば心付けであって、たてまえ上は与える必要のないものであっても、不利益を被ることのないよう、要求に応じざるをえなかったのではないか。「おこなひつ」という、施しを与えたといった意味合いの表現がなされているのは、そのためではないだろうか。以上は全くの想像であるが、「和田の泊のあかれの所」が交通の要衝であるところから生じうる事態について、推測を試みた次第である。

かくてふねひきのぼるに、なぎさの院といふところをみつゆく。

（注）「かくて船ひきのぼるに、渚の院といふ所を見つつゆく」とあるのは、渚の院を船から遠望しつつ通過したの意であろう。このあと十一日条では、男山の石清水八幡宮を人々は遙拝している。淀川東岸の河内国側に停泊、あるいは上陸したとの記述がないことに注意しておきたい。

その院、むかしをおもひやりてみれば、おもしろかりけるところなり。しりへなるおかには、まつきどもあり。なかのにはには、む

めのはなさけり。ここにひとびとのいはく、これむかしなだかくきこえたるところなり。故これたかのみこのおほむともに、故ありはらのなりひらの中将の、よのなかにたえてさくらのさかざらばはるのこころはのどけからまし、といふうたよめるところなりけり。

(注) 底本「きこへたる」を「きこえたる」に、「たへてさくらの」を「たえてさくらの」と校訂した。

「中の庭には、梅の花さけり」というのは、この日が二月九日(グレゴリオ暦三月十九日)であることと矛盾はなく、実景であつたとも思われるが、庭に咲く梅という情景が、貫之の一首「人はいさ心もしらずふるさととは花ぞ昔の香ににほひける」を想起させ、この後の叙述に影を落とすこととなる。『古今集』のこの歌(春上・四二番歌)の詞書の引用は省略するが、そこには「花」が梅花であることが明記されている。

惟喬親王と在原業平の名に「故」字が冠せられているのは、このころ二人がすでに故人であるからには、当然のことのようでもある。しかし、一月八日条には業平は「業平のきみ」と親しみをこめて呼称されていて、「故」字は冠せられていないし、一月廿日条に見える安倍仲麿の名にも「故」字は冠せられていない。なぜここに限って「故在原業平の中将」などと、堅苦しい呼称がなされているのであろうか。

『全注釈』は「故」というのは、亡くなった人につける接頭語であるが、こうした修辭にも、強い氏族意識に改まった気持、厳肅な気分を示そうとする作者の姿勢がうかがわれる」と述べた上で、惟喬親王と紀氏との血縁に言及し、さらに「正月八日の条における「な

りひらのきみ」というくだけた呼び方に対して、随分四角張つたこの呼び方に、歴史を回顧する厳肅な気持を反映させようとする貫之の修辭的技巧及び、強い氏族意識が感知せられる」とも述べている。しかし、「これ、昔名高くきこえたる所なり」以下は、人々の話を「作者」が筆録したことになっているのであるから、紀貫之の「氏族意識」を強調するのはいかがかと思われる。

ここで語られているのは一種の「歌語り」とも言えようが、この「歌語り」の特徴は、業平の歌が詠まれるに至つたいきさつについては、おそらく自明のこととしてほとんど語られず、この歌が詠まれた著名な場所がまさに眼前にあるということが強調されている点にある。つまり、事情に通じた人たちが、女性や子供をも含むその場の人々の前で、この地にまつわる過去の著名な出来事について語っているというのが、この場面なのである。「故惟喬親王」「故在原業平の中将」という呼称は、さほど古くはない歴史上の人物の紹介なのであつて、大きく時代をさかのぼる人物(たとえば安倍仲麿)には「故」は付されない。

「世の中にたえて桜のさかざらは春の心はのどけからまし」の第三句については、作者が「なかりせば」を「さかざらば」と改めたとするのが通説である。しかし『古今集』諸本のうち、元永本、伝公任筆本、清輔本、雅経本、永暦二年俊成本など主要な伝本には「さかざらば」とあり、「なかりせば」とするのは定家本など少数の伝本にすぎない。『古今集』においては本来「さかざらば」であつた可能性が大きいといえよう。また『伊勢物語』(八十二段)においても、伝民部卿局筆本系統をはじめ、「さかざらば」とする伝本がある。貫之による改変とする通説には従い難い。

また、あるひとのよめる

きみこひてよをふるやどのむめのはなむかしのかにぞ

なほにほひける

といひつつぞ、みやこのちかづくをよろこびつつのぼる。

(注) この歌については、諸注が貫之の作「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける」と「同趣向」(『全注釈』)、「同発想」(『新編土左日記』)などと指摘している通りであるが、見逃してはならないのは、それがきわめて意図的になされていることである。先に「中の庭には、梅の花さけり」とあり、読者が貫之の梅香詠をちらりと思い浮かべたところで、早速「昔の香にぞなほにほひける」とくれば、「ある人の詠める」などと言いながら、実は貫之自身が旧作をもじって面白がっているのだと、読者は了解する。楽屋落ちの趣向である。なお、「人はいさ…」歌は現在、『百人一首』によってよく知られているが、貫之存命中にすでに著名歌であったことが、ここから推測される。

ひとみな、ふねのとまるところに、こをいだきつつおりのりす。

(注)『全注釈』に「発育上、多くの運動量を必要とする乳幼児は、船中の刺戟のない単調な状態に飽きて、きわめて不機嫌となり、泣いたりむずかたりするものである。そこで母親たるもの、船が碇泊するたびに子供を抱いて船着場に降り立ち、子供をあやししながらその辺を歩き廻って機嫌をとらねばならない」とあるのは、全くそ

の通りであろう(ただし、「人みな」を母親に限定しているのは問題)。しかし、もうひとつ見逃してはならないと思うのは、子供が排泄物で船を汚さないように、機会があるたびに岸に上がって用を足させる必要があったのではないか。当時の船霊信仰がどのようなものであったかは承知していないが、船師や楫取が船の穢れを忌んで船客にうるさく注意したであろうことは想像できよう。ちよつとした記述であるが、当時の船旅によく見られた情景なのであろう。

これを見て、むかしのこのはは、かなしきにたへずして、(歌略)といひてぞなきける。ちちもこれをききて、いかがあらむ。

(注) 亡児の父の存在が明記されるのはこのみである。ただし二月四日条に、「船なる人」の歌に唱和した「ある人」は亡児の父であろうと推測される。「略注(五)」参照。なお、繰り返し述べてきたように、亡児の父母は「作者」の身内である若夫婦であり、船君とその妻ではない。まして貫之夫妻は、この作品に登場しない。

かうやうのこともうたも、このむとであるにもあらざるべし。もちしもこしも、おもふことにたへぬときのわざとか。

(注)「かうやうのこと」が何をさしているかについては議論があるが、野中春水『土佐日記新釈』(白楊社 昭和三十年)は諸説を紹介した上で、次のように述べている。

「次に「思ふことに堪へぬときのわざ」とあるが、この「わざ」が「かうやうのこと」も、歌も」を指していることは文脈から自然であろう。

ところで「わざ」というのは「島坂にて人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり」などとあるように、やはり「しぐさ」「ふるまい」といった意味である。然らば「歌」は歌をよむことであり、これに対する「こと」は「事件」といったような意味でなく、「言」と見るのがおだやかであろう。」

説得力のある考察であると思う。ただし野中先生はこのあと、いささか躊躇しながらも、「こと」を漢詩と解釈しているのであるが、これには同意できない。「こと」は広く言葉の意味し、「うた」は「から歌」と「やまと歌」を包括して、下の「もろこしもここも」に対応していると見たい。

ところで、『土左日記』作中に、言葉の意味する「こと」としては「あひごと」に心よげなることとして、出で入りにけり（十二月二十六日）、「まだ幼き童のことなれば」（一月十一日）、「数はたらでぞ帰るべらなる、といふことを思ひいでて」（同）、「この歌は、つねにせぬ人のことなり」（二月十八日）、「もろこしとこの国とは、こと異なるものなれど」（二月二十日）、「楫取の申して奉ることは、（一月二十六日）、「月を望めば都とほし、など言ふなることのさまを聞きて」（二月二十七日）、「船君のからくひねりいだして、よしと思へることを」（二月一日）、「楫取はうつたへに、われ歌のやうなること言ふともあらず」（二月五日）、「船君の病者、もとよりこぢちしき人にて、かうやうのこと、さらに知らざりけり」（二月七日）などがある。「こと」が、主客の会話、幼児の言葉、和歌、母国語、神への言上、漢詩など、さまざまな言葉の意味していることが見て取れよう。

こよひ、うどのといふところにとまる。

（注）「鵜殿」は淀川西岸、大阪府高槻市鵜殿あたりである。ここまで読んできて少し気になるのは、この淀川遡上の船旅において、船が停泊したとされているのは全て川の西岸、摂津国側であり、東岸の河内国側に停泊したとの記述がないことである。すなわち、二月八日は西岸の「鳥養の御牧といふほとり」に宿泊し、九日に立ち寄った「和田の泊のあかれの所」も、宿泊した鵜殿も西岸であり、十一日には西岸の山崎に到達している。一方、先にも指摘したように、この日、淀川東岸の渚の院は、望見するのみで通過し、十一日には東岸の石清水八幡宮を遙拝して、いずれも停泊、上陸には至っていない。ひよつとすると、一行の船は淀川の西岸に沿って遡航したのではなからうか。

ここからは憶測であるが、淀川を上下する船は、上り船は西岸沿い、下り船は東岸沿いの航行、すなわち左側通行が定められていたのではなからうか。淀川を航行する船舶はおびただしい数にのぼる上に、船の主たる動力源が綱手による曳航であったからには、このような取り決めがなければ、上下する船が錯綜し、通行が阻害されるのではなからうか。

二月十一日

かくてさしのぼるに、ひむがしのかたに、やまのよこほれるをみて、ひとにとへば、やはたのみや、といふ。これをききてよろこびて、ひとびとをがみたてまつる。



(注)「八幡の宮」は石清水八幡宮。「人に問へば、八幡の宮といふ」について『新編全集』は「京の人々である一行がこれを見知らぬはずはない。ここは帰京の喜びを劇的に表現するための虚構」と説くが、見知らなかったのは女性「作者」であり、「作者」に訊ねられた人は見知っていたのである。また「作者」たちも石清水八幡宮の評判はかねて知っていたので、「人々をがみ奉る」のである。京の住人であつても特に女性は、近郊の風景になじみがないということもありえただろう。

ここに、相応寺のはとりに、しばしふねをとどめて、とかくさだむることあり。

(注)「とかく定むることあり」について『全注釈』は、「ここで上陸するか淀の津までゆくか、自宅までの車はどうするか、楫取りや船子たちに対する運漕賃の支払いをどうするか、といったことを相談したのであらう」と推測しており、確かにそのようなことも話し合われたかもしれないが、まず決定すべき最重要事項は、入京の日時ではなからうか。「略注(一)」で私は、「その年のしはすの二十日あまりひとひの日の、戌の時に門出す」に注して「門出の日取と刻限は、陰陽師によつて勘申された大切な決まり事であり、厳守されなければならなかつたのであらう」と述べたが、それは京への帰着においても同様だつたのではないだろうか。前掲拙稿「土左日記に見る淀川水運」に「入京に際しても、その日時について陰陽師に諮問するのは当然であつたに違いない。二月十六日夜の入京が至当との陰陽師の勘申を受けて、その日までに船荷を荷車や小舟に

積み替えて、京の前国司邸に送付する段取りなどが話し合われたのであらう」と述べておいた。

二月十二日

やまざきにとまれり。

(注)この日「山崎に泊れり」とあり、翌十三日にも「なほ山崎に」とある。このように、京まで約半日の山崎で日数を費やしている最大の理由は、前項で述べたように、十六日夜の入京が至当との陰陽師の勘申に従つて、その日までこの地にとどまることとなつたからであらう。久保田孝夫は『土佐日記』の「山崎」(『中古文学』第八十七号 平成二十三年五月)において、二月十一日から十六日までの山崎滞在は、貫之が当時山城守であつた源公忠と共に、山崎の国司館で、土佐国在任中に亡くなつた醍醐天皇、宇多法皇、藤原定方、藤原兼輔の死を嘆き悲しむ時間であつたと推測している。しかし、一族郎党と貴重な積荷を船に放置したままで、貫之一人が国司館へ出向いてそのような数日間を過していたとの推測は現実的ではない。

二月十四日

けふ、くるま京へとりにやる。

(注)「取りにやる」という表現からは、前国守(船君)が自らが所



有する車を部下に命じて取りにやつたと読み取れる。従つて『全注釈』に「京の自宅へ牛車を取りにゆく使いの者を出したのである」、「新編全集」に「自邸に乗り物を取りにやつたのである」などとあるのは、その通りには違ひない。しかし、ここには考えるべき問題がひそんでいるように思う。もし前国守（諸注によれば貫之）の京の自宅が、二月十六日条に見るような荒廃ぶりであつたとするならば、そこに五年以上放置されていた車は、はたして使用に耐えるであらうか。次項にて考えたい。

## 二月十五日

けふ、くるまゐてきたり。

（注）昨日、車を取りに京の屋敷に向かつた者たちが、今日、車を曳かせて戻つて来たのである。屋敷に五年間放置していたボロ車を、どこかで借用した牛に曳かせてやつて来たのであらうか。

おそらくそうではないだろう。詳細は翌十六日条において述べることとするが、京の前国守邸は、あるじの不在の間も留守家族や使用人たちによつて維持されており、車は常に利用できるように整備され、牛も飼養されていたのではないかと思うのである。十六日の帰宅の場面に描かれる荒廃した家は、前国守邸ではなく、「作者」とその家族たちの家なのではないだろうか。

ふねのむつかしさに、ふねよりひとのいへにうつる。

（注）十一日に船が山崎に到着してからこの日まで、一行は船の「むつかしき」に辟易しながらも船中にとどまり、ようやくこの日、上陸をはたしたのである。上陸すれば何かと物入りであることはこの直後に記述されている通りで、そのため船中泊を続けてきたのであるが、それならばいっそのこと、さつさと上陸して京に向かえばよさそうなものである。それができなかったのは、二月十一日条で述べた通り、十六日の入京が陰陽師の勘申によつて定められており、その日まで山崎あたりに滞在し続けなければならなかったからに違ひない。

## 二月十六日

けふのようさつかた、京へのぼるついでにみれば、やまざきのこひつゝのゑも、まがりのおほぢのかたも、かはらざりけり。

（注）「山崎の」以下は、従来、解釈に困難をきたしてきた部分である。ただ、引用文の直後に「売り人の心をぞ知らぬ」とあるから、店頭風景はかつてと変わらないが、商人の心はどうだかわからない、という話の流れであることは確かであらう。萩谷『全注釈』が、「山崎」と「まがり」が地名として対応し、「小櫃」と「大ぢ」が商品名として対応し、「絵」と「形」とが看板の意として対応し、対をなしているとして、「山崎（の町の店屋）の小櫃の絵看板も、曲り（の河岸の釣具屋）の大釣針の提げ看板も、（以前と）すこしも変わってはいなかった」と解しているのにはばく従つておきたい。私としては、この難解な一節の意味が解明されるにこしたことはない

思うが、ここでは解釈にこだわることなく、後考をまちたいと思う。店頭風景がかつてと変わっていないという基本的な流れさえ押さえおけば、とりあえずはそれでいいように思うのである。

うりひとのころをぞしらぬ、とぞいふなる。

〔注〕「売り人の心をぞ知らぬ」という誰かの言葉が「作者」の耳に入ってきたのである。二月九日条において、「君窓ひて世をふるやどの梅の花昔の香にぞなほ匂ひける」の一首について、これが貫之の歌「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける」と同趣向であるのみならず、それがきわめて意図的になされた楽屋落ちであろうことを述べた。ここの「売り人の心をぞ知らぬ」も、同じく「人はいさ心も知らず」のもじりであり、一種の読者サービスであることに変わりはない。当時の諺かとする説もあるようで（『岩波文庫』脚注など）、それを否定する根拠はないが、面白味に欠ける解釈ではなかろうか。

よるになして京にはいらむとおもへば、いそぎしもせぬほどに、つきいでぬ。

〔注〕「夜になして」は、わざわざ夜になるのを待って、の意で、『更級日記』の上京の旅においても、「暗く行きつくべくと、申の時ばかりに立ちてゆけば」とあるように、作者たちは暗くなるのを待って入京している。これらについては、荷物の多寡を好奇の眼で見られるのを避けるため、あるいは長旅のやつれを人目にさらさないた

め、といった説明がなされるのが常である。しかし、先にも述べたように、入京の日時については陰陽師の勘申を遵守しなければならず、おそらく戌、あるいは亥の刻が指定されていて、それに合わせて入京したのであろう。

ところで、荷物に関して言えば、満載されていたであろう船荷の大部分は、二月十一日から十六日までの山崎滞在中に陸揚げされ、京の前国司邸に運ばれていたに違いない。六日間もの間、貴重な積荷を満載したまま船を係留し、事故や盗難の危険にさらすことなどありえないだろう。また『更級日記』の場合、作者は体調不良のため天竜川のほとりの飯屋でしばらく療養したが、その間、一行の全員が作者につきあつてそこに滞在したとは考え難い。大きな荷物は主立った郎等に任せて先発させ、作者一家と従者たちは、作者の快復を待つて後を追つたと考えられよう。つまり、『王左日記』と『更級日記』のいずれの場合も、入京に際して荷物の多寡を好奇の眼で見られる心配などなかったのである。

よふけてくれば、ところどころもみえず。京にいらちてうれし。いへにいたりて、かどにいるに、つきあかければ、いとよくありさまみゆ。

〔注〕底本「みへず」を「みえず」と校訂した。

一行は桂川を渡り、ようやく待望の入京をはたす。「京に入り立ちてうれし」というのは、もちろん「作者」の感想だが、前国司集団全員の気持を代弁してもいるだろう。ところで、京の街に足を踏み入れるまでは、彼ら一行は行動を共にしていたであろうが、その

あとの人々の足取りは、どのようなものであったのだろうか。

前国守一家や使用人たちは、もちろん前国守邸に向かうはずだが、前国守の親類縁者や主立った家人たちの中には、前国守一行と別れ、それぞれの家に直行した者たちもいたのではなかったか。「家に至りて、門に入るに」以下は、「作者」一家の留守宅への帰宅場面ではないかと考えたい。二月十五日条にも少し述べておいたように、このあと描かれる家の荒廃ぶりは、それが前国守邸であるとは到底考えられないからである。

さきしよりもまして、いふかひなくぞこばれやぶれたる。いへにあげたりつるひとのころもあれたるなりけり。

〔注〕これを紀貫之邸の描写とするのが従来の通説で、さらに『無名抄』によって貫之邸跡の所在地が注記されるのが通例である。しかし、この「略注」では一貫して、『土左日記』はフィクションであり、実在人物たる紀貫之は登場しないと主張してきた。では、貫之邸を前国守邸と言い換えればいいのかと言えば、本稿ではそれも否定せざるを得ないのである。

そもそも、国守が京の本宅を留守にして、一族郎党の全てを率いて任地に下向するなどということはありえたのだろうか。私は前掲拙稿「土左日記を読みなおす」において、現実問題としてそのような事態はありえないであろうと主張した。次に拙稿の該当部分を要約して示したい。

『蜻蛉日記』において、作者の父、藤原倫寧が陸奥守として任地へ下向したのは天曆八年（九五四）十月であった。貫之の土佐赴任

は延長八年（九三〇）であり、その間、社会の常識が大きく変化するほど年月は隔たっていないし、いずれも遠国への赴任という共通点があるから、参考となるだろう。

『蜻蛉日記』によれば、父倫寧が下向したあと、作者はそれまでと同様、夫兼家を実家に通わせている。また作者の姉も、天曆十年（九五六）四月ごろまで作者と同じ家に住み、夫を通わせているのである。倫寧としては、娘二人に婿を通わせているからには、赴任後も彼女たちの結婚生活のために京の屋敷を維持するのは、当然の責務であったに違いない。さらに彼女たちの母親、すなわち倫寧妻も、天徳元年（九五七）七月ごろ、作者と同居していることが知られるのであるが、それは倫寧の陸奥守在任中である。倫寧と共に下向したあと單身帰京したのか、あるいは最初から下向しなかったのかはわからないが、作者の母の陸奥下向をにおわせる記述が何もないことからすると、もともと下向しなかったのではなからうか。

『蜻蛉日記』作者の妹、菅原孝標妻が、夫の任地である上総国、常陸国に同行していないことは、孝標女の『更級日記』によってよく知られた事実である。倫寧妻や孝標妻にしてみれば、夫婦関係も疎遠になりつつある夫と共に地方へ下向して苦勞するより、京に残って留守家族と共に暮らす方が気楽であるし、ひよっとすると彼女たちには、家刀自として京の留守宅を維持管理する責任の一端が負わされていたのかもしれない。

主人が地方官に任命されたとしても、家族や一族郎党の中には、さまざまな理由から主人の任地へ下向しない人々が少なくなかったのではないか。そうした人たちが京の屋敷に住み続けるとなれば、世話役の女房や乳母、下働きの男女、警備担当の侍、牛車担当の牛

飼童など、多くの人員が必要となるし、留守宅の維持管理のために主人に命じられて居残る家人もいたのではないか。こうして留守宅が機能しているからこそ、山崎から牛車を取りに、京へ人を派遣することもできたのである。

一方、京の国守の留守宅は、中央官庁と地方の国府との中継基地としての役割もになっていたのではないだろうか。いわば、国府の京都出張所ともいべき機能である。そうすると、留守宅を守る家族や家人の中には、中央官庁と国府との間でやりとりされる文書や物品を適切に処理する事務能力を備えた人員も必要とされよう。

おそらく、国守が京の屋敷を空き家にして、一族郎党の全てを引き連れて任地へ下向することなどありえなかった。『土左日記』作中の前国守に限って、京の屋敷を空き家にして任地へ下向したのである、などという設定は、当時の常識に著しく反するものであり、受け入れられない。京の家を空き家にして、一家をあげて地方へ下向するというのは、国守の縁者、あるいは家人といった、ささやかな家族にこそふさわしいであろう。ここに描かれているのは、そのような家族の帰宅であり、「作者」はこの家族の一員であると考えられるのである。

ながきがこそあれ、ひとついへのやうなれば、のぞみてあづかれるなり。さるは、たよりごとに、ものもたえずえさせたり。

(注) 空き家の管理を引き受けてくれた隣人には、機会あるごとに礼物を贈ってきたというのである。おそらく国府から公用で京に使者が立つ際に、「作者」一家は使者に個人的に依頼して、隣家に礼

物を届けてもらっていたのであろう。「たよりごとに」とはおそらくそういうことで、使者は国府の人々から個人的にこづかった手紙や物品をも携えて京へ向かうのが常であったにちがいない。先に「聞きしよりもまして、いふ甲斐なくぞこぼれやぶれたる」とあるように、「作者」一家は京の留守宅の荒廃ぶりをすでに耳にしていたのであるが、それは京から国府に帰還した使者からの伝聞であつたろう。

いとはつらくみゆれど、こころざしはせむとす。

(注) 心ならずも隣人に謝礼をしようとの「作者」一家の意志を、このような形で叙述する「作者」は、一家の意思決定にかかわることのできる立場にあると考えられよう。これまで「作者」を亡児の母の妹、あるいは亡児の父の妹と推定してきた根拠の一つがこの一文である。一家の使用人(たとえば亡児の乳母とか女房など)であれば「こころざしはせむとす」という記述はなしえないであろう。

おもひいでぬことなく、おもひこひしきがうちに、このいへにてうまれしをむなごのもろともにかへらねば、いかがはかなしき。

(注) 「この家にて生まれし女児のもろともに帰らねば」とあるのは、これまで作中で繰り返し言及されてきた亡女児が「作者」一家の子供であることの決定的な証拠である。「この家」は前国守宅ではないのであるから、亡女児が前国守の子供であるとか、貫之の子供であるとかいう定説は否定される。

ふなびともみな、こたかりてののしる。

(注) ここで「船人もみな、子たかりてののしる」(同船していた人たちには皆、子供が集まって騒いでいる)とあるのは、どのような情景なのであろうか。二月九日条に「かくのぼる人々のなかに、京より下りし時に、みな人、子どもなかりき。いたれりし国にてぞ、子うめる者どもありあへる。人みな、船のとまるところに、子をいだきつつ降り乗りす」とあった。これは国守と共に土佐国に下向していた人たちと、その子供たちの情景である。しかし、ここで「子たかりてののしる」とあるのは、そのような幼い子供たちではないようである。そもそも、親と同船して帰ってきた子供たちが、ここであらためて親の周りに集まり騒ぐ必然性はない。ここで騒いでいる子供たちは、京で親の帰りを待っていた子供たちであらう。この「船人」というのは、「作者」たちのように、土佐の国府で四、五年を過して帰京した人々ではなく、商用などのために家族を京に残して地方へ下向し、「作者」たち一行の船に同乗して帰京した人々ではないだろうか。彼らは船君一行の雑用を引き受けるなどといった条件で船に便乗させてもらって帰京し、今、「作者」一家のために荷物の運搬などを手伝っている。そこに彼らの子供たちがワツと出迎えたという次第ではなからうか。

『全注釈』は「連れ帰った乳幼児ばかりでなく、留守居して、それぞれに親の帰京を待っていた子供たちが、わいわい集まって大騒ぎしているわけである」と述べている。しかし、乳幼児を連れて帰京したということであれば、夫婦そろって土佐国に下向していたはずであり、四年以上も帰京できないことがわかっていながら、子供

たちを京に残して下向するとは考えられないのではないか。現に「作者」一家は女兒を伴って下向したのである。この「船人」はやはり、船君や「作者」たち国府関係者とは異なる境遇の人達と考えるべきであらう。

なお、「船人」なる語は一月九日条にも「おもしろしと見るにたへずして、船人のよめる歌(歌略) この歌は、ところを見るに、えまさらず」とある。仮にこの「船人」も右と同様の境遇の人であるとするなら、これは土佐国に短期間しか滞在しなかった「船人」が、初めて見た宇多の松原の景色にいたく感動して歌を詠み、「作者」に酷評されたというエピソードとも解せよう。

かかるうちに、なほかなしきにたへずして、ひそかにこころしれるひとといへりけるうた

むまれしもかへらぬものをわがやどにこまつのあるを

みるがかなしき

とぞいへる。なほあかずやあらむ、またかくなむ

みしひとのまつのちとせにみましかばとほくかなしき

わかれせましや

(注) 女兒を亡くした「作者」一家の人々による唱和歌である。十二月二十七日条や二月四日条における「作者」一家の和歌の唱和と同様、歌の作者が明記されていない。前掲拙稿「土左日記を読みなおす」にも述べたように、家族の誰かによって詠まれた歌が、家族全員によって共有され、くりかえし唱和され、ついには原作者が誰であったかなど、どうでもよくなってしまうのである。「唱

和がなされるのは、主に宴会や遊覧の場であつたが、家族や主従が共有する思いを吐露することもある。物語文学や日記文学にも唱和の場面は少なからず描写されている」(古典ライブラリー『和歌文学大辞典』『唱和』の項。徳原執筆)というのが、この場面にも該当する。

わすれがたく、くちをしきことおほかれど、えつくさず。とまれかうまれ、とくやりてむ。

(注)「とく破りてむ」は、実際に破り捨てようとの意ではなく、謙辞である。この二文は女性「作者」によって記された(ことになつている)跋文であり、冒頭の執筆宣言文と対応している。

「土左日記略注」完

(とくはら・しげみ 本学教授)